

長期入院低出生体重児の退院後の医療ニーズに関する研究

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムに関する研究)

研究協力者 門 井 伸 暁

共同研究者 大 田 剛 穂

要 約：NICUに長期入院していた低出生体重児の退院後の医療ニーズを把握するために、退院後の当院受診回数、再入院回数および日数を調査した。退院後の1ヶ月当りの受診回数の比較においては、長期入院児1.2回に対し、対照群は0.4回であり、有意差が認められた。さらに、再入院回数の比較においては長期入院児1.6回に対し対照群は0.6回、入院日数の比較では長期入院児35.8日に対し対照群が4.6日と、いずれも有意差が認められた。以上より、長期入院の未熟児に対しては退院後も小児科医が主体となった一貫管理と多方面からの援助が必要と考えられた。

見出し語：long term care、NICU、超未熟児、極小未熟児、医療ニーズ

研究方法：1985年1月から1989年末までの4年間に当院NICUに90日以上在院した出生体重1,500g未満の児で24ヶ月以上経過観察を行なえた43症例を対象とした。当院のコンピュータシステムにより、退院後の受診回数、再入院回数、再入院日数ならびに診断名などの情報を得た。比較のため、同じ調査期間に出生した極小未熟児のうち入院期間が90日を超過せずしかも24ヶ月以上経過観察し得た32例を対照群とした。

結果 (表1)：退院後の1ヶ月当りの受診回数の比較においては、長期入院児1.2回に対し、対照群は0.4回であり、有意差が認められた。長期入院児の診療科別受診頻度 (図1) は、小児科75.4%、眼科16.7%、耳鼻科2.6%、小児外科

1.7%であった。

再入院回数の比較においては、長期入院児1.6回に対し、対照群は0.6回であり、有意差が認められた。再入院の理由 (図2) は細気管支炎・肺炎などの気道感染が最も多く (47.1%)、次いでけいれん性疾患 (22.9%) やシャント不全 (12.9%) などの頭蓋内病変の後遺症に起因する病態であった。一方、対照群の入院理由は気道感染が62%と最も多く、次いでソケイヘルニア手術が28.6%であった。入院日数の比較では、長期入院児が35.8日、対照群が4.6日であり、有意差が認められた。

考 察：NICU長期入院児の約2/3は極小未熟児・超未熟児であり、児の未熟性に起因する病

態、すなわち慢性肺疾患、未熟網膜症、低酸素性虚血性脳症、出血後水頭症、壊死性腸炎および長期挿管による声門下狭窄などがlong term careに関与していることは既に報告した。これらの児が退院後に、病院を再受診もしくは再入院する回数は、長期入院児の退院後の医療ニーズの指標として、在宅治療中の管理方法になんらかの指針を与えるものと考え、研究をおこなった。退院後1ヶ月当りの受診回数は、長期入院児において3倍多い傾向が認められた。また、退院後1ヶ月当りの入院日数は、9倍の差が認められた。さらに退院後の受診回数と入院日数の合

計を比較すると、長期入院児（2.1／月）と対照群（0.5／月）では4倍強の頻度差が認められた。したがって、長期入院児は対照群に比較して医療ニーズが高いことが示された。受診料の検討では、小児科の受診が75.4％、次いで眼科16.7％であった。

以上の結果より、周産期医療をおこなうためにはフォローアップおよび療育部門の併設が不可欠であり、退院後も小児科医が主体となった一貫管理と多方面からの援助が必要であると考えられた。

表1 長期入院児と対照群の退院後における受診および再入院に関する比較

	長期入院児 43名 (平均±標準偏差)	対 照 群 32名 (平均±標準偏差)
出生体重 (g)	964 ± 208	1176 ± 157
在胎週数 (週)	27.9 ± 3.0	29.5 ± 2.0
総受診回数*	49.1 ± 40.2	15.0 ± 13.7
退院後の1ヶ月当りの受診回数 (A) *	1.2 ± 0.9	0.4 ± 0.3
再入院回数*	1.6 ± 3.0	0.6 ± 1.0
再入院日数*	35.8 ± 84.1	4.6 ± 9.4
退院後の1ヶ月当りの入院日数 (B) *	0.9 ± 2.5	0.1 ± 0.2
(A) + (B) *	2.1 ± 3.0	0.5 ± 0.4

* $p < 0.05$

図1 診療科別受診頻度

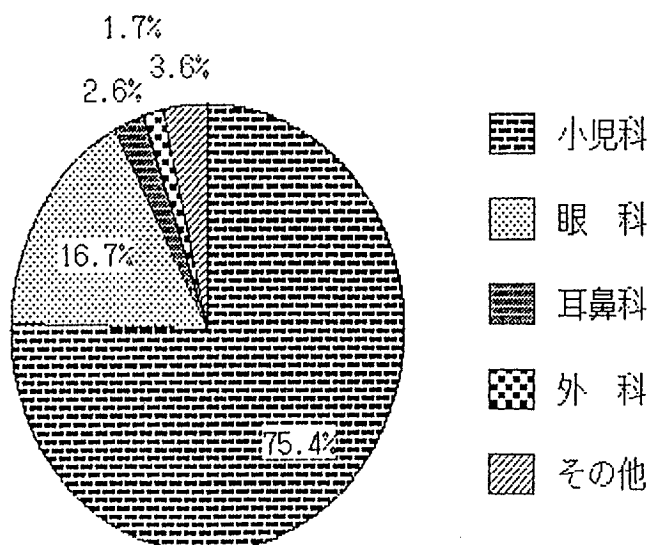
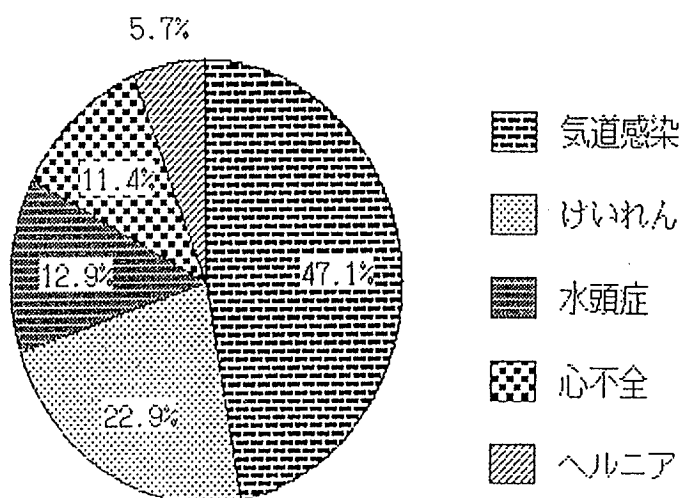
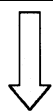


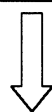
図2 再入院の理由





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:NICU に長期入院していた低出生体重児の退院後の医療ニーズを把握するために、退院後の当院受診回数、再入院回数および日数を調査した。退院後の1ヶ月当りの受診回数の比較においては、長期入院児1.2回に対し、対照群は0.4回であり、有意差が認められた。さらに、再入院回数の比較においては長期入院児1.6回に対し対照群は0.6回、入院日数の比較では長期入院児35.8日に対し対照群が4.6日と、いずれも有意差が認められた。以上より、長期入院の未熟児に対しては退院後も小児科医が主体となった一貫管理と多方面からの援助が必要と考えられた。